

風の詭計たきけい

野村胡堂

一

「親分、旅をしませんか、良い陽気ですぜ」

ガラッ八の八五郎はまたこんな途方もないことを持込んで来たのです。梅の花はもう梢こずえに黄色くなっているのに、今年の二月は妙に薄寒くて、その日も行火あんかの欲しいような曇った日でした。

「旅？ またなんか嗅ぎ出したんだろう。物見遊山には早いし、後生ごしょうぎ気や金儲けで草鞋わらじをはく柄がらじゃなし」

銭形平次は煙管を投げ出して、天文を案ずる型になるのです。

「お察しの通りだ。実はね、親分、川崎の小牧半兵衛こまきが殺されたんで——」

「なんだと？ そいつは川崎切つての大金持じゃないか」

「公方様お声掛りの家柄だ。この下手人げしゅにんを挙げなきや、土地の御用聞の顔が立たねえ。銭形の親分の引込思案は予て承知かねの上だが、そこをなんとか乗出して貰えまいか——と川崎の孫三郎親分のわざわざの手紙ですぜ」

「そこで旅をしろ——というのか。川崎や品川じゃ旅というほどの遠道じゃあるめえ。ところでお前は孫三郎親分を知って居るのか」

「知っているの段じゃありません。去年友達と江の島へ行った帰り、川崎の万年屋から使いをやって、旅籠代と小遣を借りましたよ。十手の誼よしみでね」

「飛んでもねえ誼よしみだ、それは返したんだろうな」

「綺麗に忘れていましたよ。——けさ孫三郎親分から手紙を貰って、そのと、たんに一年前の借りを思い出したんで、へッ」

「呆れた野郎だ、いくら借りたんだ」
あき

「二朱か一分ありやよかったんで、そう言ってやると、孫三郎親分は自分でやって来て旅籠屋の諸払を済ました上、その晩うんと飲んで江戸へ帰る路用が三両——」

「川崎から江戸へ行列を組んで八枚で飛ばしたって、三両要るわけはねえ。それを黙って借りて来たのか」

「へエ、ツイね、借金に剩銭は出せねえからそのまま」
つりせん

「馬鹿野郎」

平次もポンポン言いましたが、ガラッ八の徹底した呑気さには腹を立てる張合ありません。しかしこんな事がきっかけで、江戸の御用聞の平次が、八州役人の支配している、川崎まで乗出すことになったのでした。

銭形平次と八五郎が、ともかく、土地の御用聞川崎の孫三郎の家に草鞋を脱いだのは、その日ももう申刻近い刻限でしたが、中年者の孫三郎は、下へも置かぬ喜びようです。

「銭形の親分が来てくれれば千人力だ。弱音を吐くようだが、小牧の旦那が死んじゃ、いずれ公儀の御耳に入るだろうし、三日経たないうちに下手人を挙げるようにと、宿役人からも折入っての頼みだ。——どうも俺一人じゃ心配でならねえ。忙しいのを百も承知で、実は八五郎兄哥にお願いしたようなわけさ」
あにい

そんな事を言う四十男です。

やがて平次と八五郎は、孫三郎に案内されて、小牧半兵衛の大きな屋敷。——本陣と向い合って、川崎宿の名物の一つになって

いる門を潜くぐりました。中は小大名の下屋敷ほどの構えで、その一番小さいのが金蔵で、主人の半兵衛は昨日の朝、その中で殺されていたのです。

二

「これだよ」

三間に四間ほどの一番小さくて一番嚴重な土蔵は、母屋おもやから廊下伝いに続いて、そこには夥おびただしい金銀と、数代に亘わたって貯たくわえた骨董類どうるいが入れてあるのですが、三重の扉を開くとムツと腥氣せいきが漂つて、一步踏み込んだ孫三郎も、思わず足を淀ませました。

「――死骸は検屍が済んで、昨日の中に母屋おもやへ移したが、小牧の旦那がこの中でやられたんだ。手燭てしよくを斬り落されているところを見ると、後ろから飛かったやつでもない――」

孫三郎は陰惨いんさんな土蔵のなかで続けるのでした。

「声はしなかったのかな」と平次。

「誰も気が付かなかったそうだ。一昨日おとといの晩夜中近いころ、母屋のこつち寄りの部屋――土蔵に一番近いところに寝ている主人が、変な物音がするようだと言って、寝巻の上に絆纏はんてんを引っかけて、手燭を持って自分で見廻りに来たんだそうだ。年のせいか寝つきの悪い上に、恐ろしく目ざとい人で、こんなことがちよいちよいあると、お内儀が言っているが」

「刃物は持たなかったのかな」

「なんにも持たなかったらしい。それから半刻経はんとぎっても床へ帰ら

ないから、お内儀が隣の部屋に寝ている娘——と言ってもこれは先妻の子だが、——お優ゆうさんというのを起して、二人で提灯を点けて、恐る恐る来て見ると——」

「そのとき土蔵の戸は開いていたんだろうな」

「半分開いていたそうだ。恐る恐る提灯を差し込んで見ると、中は血の海だ。二人は腰を抜かすほどの騒ぎさ」

「傷は？」

「仏様はまだ母屋にあるから、あとで見てくれ。前から三太たち刀も斬り付けて、喉笛を刺したのが止とどめになって居る。いやもうひどいやり方で」

「盗られたものは？」

「なんにもないそうだ。——番頭さん、それに相違あるまいね」

「へエ——、それはもう、店からも土蔵の中からも、一文もなくなっではおりません」

五十年輩ねんばいの老実らしい支配人の忠助は、何時の間にやら後ろへ来ているのでした。

「道具類とか、書き物には？」

平次は初めてこの支配人に口をききます。

「旦那はそんなものはお嫌いで、あまりお道具類をお集めになりません。それでも御先祖から持ち伝えたのが、随分たくさんございますが先ずなんにも無くなったものはございませんようで」

土蔵の中は整然せいぜんとして、物の乱れた様子は少しもなかったのです。

外へ出て仰ぐと、母屋と五戸いつとまへ前の土蔵は切妻形きりづまがたの屋根を並べて、二月の空っ風がその間を刃やいばのように吹き抜けますが、どこから飛

んで来たか、さんざんに破れた大きな風たこが一つ、金蔵の嚴重に閉った二階窓の扉の鑲かんに引つ掛けてバタバタしているではありませんか。

「八、あとであの風を取ってくれ。糸が鑲にどんな工合に引つ掛けて居るか、それを見たい——」

平次はそつと八五郎の耳にささやきます。

それから平次は家の周囲を念入りに調べました。土蔵と土蔵の間、家の後ろなどには、滅茶滅茶に足跡が乱れておりますが、霜解頃どけではあり、多勢の雇人に踏み荒されて、何が何やらわかりません。

「鍵は誰が持っているんだ」

平次は元金蔵の前へ来ると、老番頭に訊きました。

「金蔵の鍵は主人の居間に置いて、主人か私でなければ手をつけないことになって居ります」

「金蔵の扉は毎日開けるんだね」

「格子戸と檜かしの板戸と漆喰しつくいの大扉と三重になって、中の二枚の戸はそれぞれの棧さんがひとりでおりますが、一番外の大扉は海老錠えびじょうで、その鍵は別にあります。これだけの締りですから、金蔵に用事のあるとき開けるだけで、三日も四日も締め切りのこともございます。——尤ももつと一昨日おとといは遠方から入る金があつて、宵よいにちよつと開けましたが——え、え、それはもう前からわかつていたことで御座いますとも」

「すると、仮かりに——仮りにだよ、土蔵の中に曲者が紛れ込まぎんでいたとしても、誰も開けてくれる者がなければ、三日も四日も外へ出られないわけだな」

平次は妙なことを突っ込みます。

「へエ——、まア、そう言ったわけで、外の大扉には海老錠^{えびじょう}がおりて居ますから、中の二つの戸の棧^{さん}は内からでも開けられますが——」

老番頭の忠助は苦笑するのです。

「だが、金蔵の戸を開けっ放しにして置くこともあるだろう、半刻や一刻は——」

「それはございます。屋敷内のことですから物を運ぶ時などは、ツイ扉を開けたまま、母屋へ行つて来ることもございます」

「その間に、曲者は忍び込めないと^{かぎ}は限るまい」

「忍び込んでも、中から出られません」

「人に開けさせさえすれば出られる筈だ。開ける人がなければ、二階の窓を開けて飛降りるという術^てもある」

「三間近い高さでございますよ。それに、下は忍び返しを打った塀^{へい}で」

忠助は酔っぱい顔をするのです。二階の窓は内から開けられるには相違ありませんが、飛降りるのは容易ならぬ芸当です。しかしそれも程度の問題で、丈夫な縄でもあれば、身軽なものは十分二階の窓から飛降りられないことはないでしょう。——平次はそんな事を考えている様子でした。

三

「刃物は？」

と平次。

「脇差が捨ててあったよ。番所へ持って行つたが」

「持主は？」

「それが、甥おいの伝七郎という男の品だ。尤も本人は何時の間にもなくなったと言っているが」

川崎の孫三郎は、弁解する調子で言うのです。

「どんな男だ」

「良い男だが、評判はよくない。気の荒いところがあつてね。それに今度はさんざんだよ。伯父を殺した脇差ばかりじゃない。縁の下には拾あわせが血だらけになって突っ込んであつたし、自分の床にも血が付いていた。それに——」

「まだあるのか」

「一昨日おとといの晩、自分の部屋から、雨戸をそつと開けて外へ出ている。奉公人たちは皆んな知っているが、伝七郎は亥刻よつから先ときどき自分の部屋をあけることがあるそうだ。本人は町内の師匠のところへ行つたと言っているが、町内の女師匠の鶴吉という大年増が、長いあいだ伝七郎と深い仲だから、口を合せている分にはどんな細工さいくでもできる」

「フーム」

「もう一ついけないことには、伝七郎はお嬢さんのお優ゆうさんと娶め合せられて、小牧こまきの後を継ぐことになっていたんだが、師匠の鶴吉との仲が知れて、伯父の大旦那にうんと小言を言われた上、お優さんと娶合せることも、この家の跡取にする事も破談にされてしまった」

「なるほどね。——そんなに証拠が揃っているのに、なんだって伝七郎を挙げなかったんだ」

「錢形の親分の前だが、証拠がそろい過ぎるよ。伝七郎はどんなに馬鹿だって、自分の脇差で伯父を殺し、自分の袴を血だらけにして縁の下にネジ込み、その晩町内の師匠のところへ転げ込むようなことはしないだろう」

さすがに川崎の孫三郎の推理には、老巧ろうこうなところがあります。

「だが、土蔵へおびき出して、主人の正面から切ってかかるのは、よっぽど知ってる者でなきゃ出来ないことだぜ。そんな人間というと平常ふだんこの家にいる者で、土蔵へ入っても疑われない者、——性根しっかの確りした、腕っ節の強い奴」

平次にそう数え上げられると、疑いはまた伝七郎の方へ戻って来るのです。

「そんな人間は伝七郎のほかにはない。奉公人は多勢いるが、支配人の忠助と、甥おいの伝七郎と、通いで帳面をしている又六のほかには、子供や女ばかりだ」

孫三郎はこんな事をこまごまと説明しながら、平次を母屋みちびに導くのです。

主人——小牧半兵衛の死骸は、見るも無残でした。五十八というにしては、恰幅も見事、若い時は撃剣げっけんの一と手くらいはやったらしく、容易に人に斬られる筈もないのですが、土蔵の中で全く不意に襲われたのでしょう。

平次は線香をあげて仏の前から退くと、

「御主人は土蔵へ入ったとき、後戸を閉める癖があつたと思うが——」

忠助へ訊ねました。

「へエー、その通りでございます。夜分などは泥棒に跟つけ入られ

るからと仰有^{おっしゃ}って中へ入ると必ず後戸を締めました」

「だから、それだけの騒ぎも外へは聞えなかったんだろう。心得たやり方だな」

平次は曲者の悪智恵に、舌を捲^まくばかりです。土蔵の中におびき入れた細工や、主人の習慣をよく知り抜いたやり口は、いかにも憎いほどの行届きようです。

「親分さん、御苦労様でございます」

次の間から入って来たのは、死んだ主人の後添^{のちぞえ}お千世でした。

三十五六の素晴らしい大年増で、身扮^{みなり}の派手なこと、顔の表情の大袈裟^{げさ}なこと、化粧の濃いことなど、年齢にも身分にも、場所柄にも不似合の感じでした。後ろから覗くように小腰を屈^{かが}めたのは、その継娘で小牧家の一粒種、曾^{かつ}ては甥の伝七郎と娶^{めあわ}合せようとしたお優でしょう。これは十八九の目鼻立の美しい、表情の内輪な、いずれかと言えば淋し気な娘で、継母のお千世とは全く違った世界に住む人間の感じでした。

「一昨日^{おととい}の晩のことを詳しく聴^{くわ}かして貰^くいましょうか、お内儀さん」

「私はまア、何うしましょう。こんな事になって、主人だってあんな虐^{むじ}たらしい死にようをしては浮^うばれません。どうぞ、お願いだから下手人^{げしゅにん}を挙^あげて、敵を討^うって下さい」

お千世は平次の問いとは凡^{およ}そ縁の遠いことを恐ろしい勢いでまくし立てるのです。

「え、目ざとい人で、夜でも夜中でも、気になることがあると、自分一人で見廻りました。あの晩も夜中頃になって、金蔵の方でそりや変な音がしたんですもの。プーンと言^のった鋸引^{のこぎり}でもするよ



うな、^{あぶ}蛇が障子の間へ入ったような、——私も聴きましたとも。すると主人は飛起きて、^{はんでん}絆纏を引っ掛けて、^{てしよく}手燭と鍵を持って、廊下伝いに土蔵の方へ行きました。それっ切り半刻経っても帰らないじゃありませんか。あんまり心配だから、隣の部屋に寝ている娘を起して、二人で、行つて見ると——」

土蔵の戸は半分開いていたこと、中を一目見て悲鳴をあげたこと——お千世は身振りがたくさんに話すのです。

「ところで、御主人が^{ふだん}平常一番信用していたのは誰でしょう」

「番頭の忠助どんですよ」

当り前のことと言わぬばかりです。

「それから？」

「通い番頭の又六どん」

「伝七郎さんとか言う^{おいこ}甥御は？」

「そうですね」

お千世の饒舌じょうぜつもその問いには容易に応えられそうもありません。それからお優ゆうの聳や、この家の跡取のことも訊きましたが、お千世はこの問題にもあまり触れたくない様子です。

つづいて娘のお優にいろいろ話しかけて見ましたが、若さと、恥かしさと、恐ろしさに顫ふるえて、何を訊いてもハキハキとした答えは得られません。ただ伝七郎の事を訊いた時だけは、

「あの方も可哀想です。——お父さんはやかましかったんですもの」

十分同情のある調子でした。

四

「親分、この方は、何処どこの人だえ」

甥の伝七郎の声は尖とがりました。二十四五の髯ひげの跡の青い、背の高い、たくましい感じの男で、無暗に笑顔などを人に見せない、——その癖、血の気の多い若者です。

「銭形の親分だよ」

「あ、そうか、近ごろ評判の」

伝七郎は軽くあしらいますが、江戸の御用聞で、川崎まで乗出して、我物顔に振舞うとでも思ったのか、その反感は顔色にも、声の調子にも溢あふれます。

「伝七郎さんとか言いなすったね、少し訊きたいが」

平次はそれに構わず仕事を進めました。

「お前さんには気の毒だが、証拠はあの通り妙に揃っている。第

一番に御主人を殺した脇差はいつ頃からなくなつたんだ」

「知りませんよ。一年ばかり前芳町の刀屋で冷かし損ねて一両二分で買った道具だが、用事がないから、押入へ投り込んだきり、三月も半歳も見たことのない品だ」

あわせ
「拾の方は」

「洗濯を頼んで出しておいたが——」

伝七郎もそう畳みかけられると、さすがに困惑します。

「おととい一昨日の晩、どこへ抜け出したか、それも訊かなきゃならない」
「何べんも同じことを言いましたよ。町の鶴吉師匠に訊いて下さい」

伝七郎はいかにも忌々しいと言つた調子です。

「孫三郎親分、又六とか言う番頭は見えないようだが」

「又六どんは店にいますよ。相変らず帳面の方で——」

お千世は取なし顔に店の方を指しました。其処へ、

「これは親分さん方、御苦労様で」

三十八九、やがて四十年輩のねんばい小作りの愛想の良い男が入つて来ました。

「お前は又六だね、——剣術をやつたことがあるかい」と平次。

「飛んでもない。親分」

又六は飛上がるほどおどろいた様子です。色白できゃしゃ奢車で、筆跡の美しい、内気な又六に、剣術の取合せはあまりに唐突です。

「いつ頃からこの店にいるんだ」

「三年になります。その前は日本橋の佐野屋さんの帳場におりましたが、佐野屋さんが分散した時、この家の旦那様に拾われて参

りました、へエ」

「一昨日のことを詳しく聴きたいが――」

「私はどういふものかあの日は朝から熱があつて、赤い顔をして
いると言われましたが、とうとう我慢ができなくなつて申刻（ななつ四
時）前に帰らして頂きました。晩飯も抜きまして、葛根湯を二杯
も呑んで、一寝入りとすると、あけがた暁方御店から小僧が飛んで来まし
た。旦那様が――」

「お前の家はどこなんだ」

「この裏でございます。なアに五丁とも離れてはいませんが」

「お神さんや子供衆はあるだろうな」

「女房に早く死なれて、叔母と二人で住んでおります」

この男は訊けばいくらでも話してくれそうです。

それから一刻あまり、灯が入って、夕飯の済むまで、平次はこ
の上もなく念入りに家の中を調べました。いざ引揚げようという
時、

「孫三郎親分、伝七郎を挙げてくれまいか」

平次は孫三郎を物蔭に呼んで囁くのです。

「え？ 伝七郎を――あの男が下手人？」

「そうだ。あれだけ証拠が揃つちや、放つてもおけまい」

「だって、証拠があり過ぎるぜ。伝七郎は一国者だが、悪党や、
馬鹿じゃない」

「――俺が縛ると事免倒だ。めんどろともかく頼むぜ」

「そいつはいけないよ、銭形の親分。もう少し本当らしい証拠が
なきゃ、俺が笑い物になる」

「あれだけ証拠が揃つていれば申分はないと思うが――」

「だが、——その証拠はみんな拵え物だ」

孫三郎は頑がんとして聴き入れません。日頃の交際で、伝七郎の正直さをことごとく信じ切って居るためでしょう。

「後悔するようなことがあるかも知れないが——仕方があるまいな」

平次は諦らめ兼ねる様子ですが、それでも自分で縛るほどの気にはなれなかったものかそのまま孫三郎の家へ引揚げました。

五

「親分、金蔵の窓の風たこを取って来ましたよ。鑲かんに糸が通してあったんで、飛んだ大骨折さ。風は滅茶滅茶にこわれているが、唸うなりは立派だ」

ガラッ八は暗くなってから風を持って孫三郎の家へやって来ました。

「成程こいつは良い風だ。第一唸りが良いね、雁皮がんびで念入りの細工だ」

「ところで親分、今晚なんか仕事がありますか」

「大ありだ。孫三郎親分の子分衆といっしょに、伝七郎の身許を念入りに調べてくれ。師匠の鶴吉とどんな事になっているか、金遣づかいはどうか、お優ゆうとの間はどんな事になっているか。——待つてくれ、それから書き役の又六の方も調べるんだ。あの男の家に

若い女がいないか、化粧道具があるかないか、それを見るが宜い。白粉おしろいでも紅でもあったら借りて来い。一緒にいる叔母さんはどんな人間か、暮し向はどうか、日本橋の佐野屋にいる時の勤め振り

もわかると宜いが、これは急のことではむずかしkarou。——どっこい、まだあるよ」

「まだあるんですか、親分」

「後添のお千世、あのお内儀を調べるんだ。こいつは孫三郎親分の方が知っているかも知れないが、身許から身持、この頃の様子と言ったところだ」

この夥おびただしい用事を背負い込んだガラッ八は孫三郎の子分二三人といっしよに飛出したことは言う迄ありません。

その晩、夜中近くなつて歸つて来たガラッ八の報告というのは、——伝七郎は正直者で金離れがよく、一徹てつで短気ではあるが、町中の評判の良いことから、師匠の鶴吉とは腐れ縁くさで、本人は手を切りたがっているが、鶴吉の方でなかなか離さないこと、お優との間は平凡な従兄妹いとこ同士で、それ以上に深い関係などがあるうとは思われぬこと、——それから、

「又六の所へはときどき若い女も来るらしいが、叔母さんというのは金聾かなつんぼだから、又六の内証ないしよごと事なんか判りやしません。暮し向は良い方で金もうんと持っているそうです。家の中には紅も白粉もありましたよ。——この通り」

ガラッ八は懷ろから平次に言われた通り、又六の家から持ってきた白粉の紙包みと紅皿を出して見せるのでした。中を開けて見ると、白粉は殆んど手もつけておりませんが、口紅はいくらか使った様子で、白い紅皿の肌がほんの一部分剥はげております。

「お内儀は？」

「あれは大変な女で、あんなチャラチャラしているくせに、恐ろしく勘定高くて握りこっ拳で口やかましくて奉公人泣かせですよ。

品川の茶屋の娘だそうで、又六とは仲が良かったようですが、近頃は妙に睨み合ってるそうです。伝七郎とは反そりが合いません」

そんな事がガラッ八の搜り出した筋でした。

それから半夜。翌る朝はまた事件が思わぬ新しい局面を見せておりました。

「銭形の、大変だ。今度はお嬢さんがやられた。命は無事かも知れないが」

「えッ」

孫三郎の声におどろいて飛起きた平次は、朝の支度もそこそこに八五郎や孫三郎といっしょに飛出しておりました。

小牧の屋敷では重なる騒ぎに煮えこぼれるよう。美しい娘のお優ゆうが、ゆうべ真夜中過ぎ、何者とも知れぬ曲者に襲われて、短刀で二度まで刺され、床から抜け出して氣を喪ったところを、隣の部屋に寝ている継母のお千世に見付けられ、危ない命を助かったというのです。得物は箆たんす筥に入れてあった死んだ主人の短刀。それは血に染んだまま投げ捨ててありました。曲者はどこから入ったか、まるで見当もつきません。

「孫三郎親分、ゆうべ伝七郎を縛っておけば、こんな事はなかったんだが」

平次は傷ついた美しい娘を痛々しく見やっついていかにも口惜くやしそうです。

「今からでも宜かろう、銭形の」

孫三郎はゆうべの失策に懲こりて、一挙に伝七郎を挙げようと逸はやるのです。

「待ってくれ、親分」

「いや、放つて置けない奴だ。伯父を殺した上に、従妹まで——」
「その前に少し訊いて置きたいことがある。家中の者を皆んなここへ揃えてくれ」

平次は孫三郎を撫めて、家中の者を全部奥の一間に集めました。隣の部屋では傷ついたお優が、外科の手当でうつらうつらと眠っている様子。

「皆んな揃ったら訊きたいことがある。隠さずに言ってくれ」

平次は一同の顔を見渡しました。そこには派手なお内儀のお千世を始め、老番頭忠助、書き役又六、甥の伝七郎を始め、小僧、下女まで十幾人、固唾を呑んで控えたのです。

「この中で一番器用なのは誰だろう、細工事などのうまい」

「又六どんだ」

小僧の一人が言下に応じました。

「有難う。ところで、この風は誰のだえ。誰が拵えたんだ。——なかなか唸りの工合などよく出来ているが——」

「伝七郎さんだ」

小僧の他の一人が答えます。

「実を言うと、主人を殺したのはこの風なんだ。風は金蔵の二階の窓の鑲に掛っていた。——引っかけておいたと言った方が宜いだろう。糸は鑲を通してあったそうだから。夜になって風向が変わると、土蔵と土蔵の庇間を吹き抜ける風が、この風の唸りに当たってブーンと鳴る。——御主人はそれを聴いておどろいて飛起き、土蔵へ入って見ると、中に隠れていた曲者が飛出して、いきなり手燭を斬り落した。あッと言う間もない、三太刀、四太刀、滅茶滅茶に斬ってとうとう止めを刺し、土蔵から飛出した曲者は、血

飛沫で汚れた袷を脱いで縁の下に突っ込んだ。――風は用事が済むとすぐ引きおろすつもりだったが、糸が切れてうまくおろせなかった――これを窓の鑲に残したのは曲者の大手ぬかりだ」

あまりの事に一同は息を吞みました。平次の説明はなおもつづきます。

「曲者はあの晩金が入った土蔵を開けることを知っていた者だ。多分ちよつとの隙を見て土蔵に潜り込んだのだろう、そしてゆるゆる二階の窓の風の細工をして、風の変るのを待っていたんだらう」

平次の言葉が終るか終らぬに、

「野郎ッ、伯父の敵だッ」

そこにあった血染の短刀を取って、パツと又六に飛付いたのは、甥の伝七郎でした。

「あ、待った」

止める隙ありません。逸りに逸った伝七郎の短刀は逃げる又六を追って、グサツとその首筋へ。まことに伝七郎は火のような激しい気性の男だったのです。

×

×

伝七郎はその場で神妙に縄を打たれましたが伯父小牧半兵衛を殺し、従妹のお優に傷を負わせた敵――又六を討った経緯が明白になって間もなく許された事は言うまでもありません。孫三郎と平次は一応手ぬかりを叱られましたが、半兵衛殺しの下手人を明白にして、御用聞としての面目の立ったことで満足したのです。「半兵衛殺しは、伝七郎か又六か、どっちかに違いないとは思ったが、どうして伝七郎でないと判ったんです。親分は前の晩伝七

郎を縛らせようとしたじゃありませんか」

事件が落着いてから、ガラッ八はいつものように平次に説明をせがむのでした、

「あの時、俺はもう下手人げしゅにんは又六と判っていたが、困ったことにまだ証拠が揃わない、そうかと言って、伝七郎をあのままに置いてくと、又六はまたなんか悪企わるたくみをするに違いないと思ったんだ。伝七郎が殺されるか、お内儀がやられるか——まさかお優を殺して伝七郎に疑いを向ける細工をするとは思わなかったが——」

「へエ——恐ろしい野郎ですね」

「あの日又六が朝から赤い顔をしていたと聴いて、紅を塗ったんじゃないかと思ひ付いたよ。あの晩金が入って、宵には金蔵を開けると前から判っていたから、そんな細工をして、夕方自分の家へ帰ったんだろう。縮尻しゅくじって主人が夜中に来なければ、窓から金を持って逃出して、泥棒のせいにするつもりだったのさ。うまく行ったから、主人を殺しておいて、伝七郎が家を脱出した後から入り込んで床へ血など付けておいた。——お優を斬ったのもその術てさ。伝七郎の抜け出した後から忍び込んだに違いない」

「太え野郎ですね」
ふて

「金に手をつけないのは、伝七郎に疑いをかける術てだ。主人が死んで伝七郎が処刑しおきになれば、あの家の金は又六の自由になる。番頭の忠助などは木偶でくのようなものだ。望みは小さくないよ。——だが、あんまり細工が過ぎて却かえって伝七郎の疑いが薄くなったのさ。小器用な悪党は、大概たいがいしなくても宜いことをして尻尾つかを掴まれる」

「悪い野郎があつたものですね」

「店の金だって、宜い加減取り込んでいるのだろう。それにお内儀の様子があの通りだから、主人が死ねば、自分が後釜に直れると思つたのかも知れない。お千世の浮気っぽい様子もよくないよ。女のジャラジャラしたのは間違を起すもときさ。――性根が固くたつて弁解になるものか」

「へエ、――馬鹿な奴だね」

「悪人はたいてい馬鹿だよ。――それに比べると伝七郎は川崎一番の正直者さ。伯父殺しの下手人が又六と判ると、ツイかつとなつたんだ。あの男も、師匠の鶴吉との腐れ縁はあるが、いずれはお優さんの聲になつて小牧の跡を取るんだらう」

平次の説明を聴くともはや疑いを挟む節もありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「文藝讀物」昭和十九年二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部